

# 日本語の状態変化表現 —中上級レベル仏語母語学習 者の困難点から—

# 状態変化の表現

- 「なる」動詞を用いた表現
- 動詞に接続する「てくる」表現の時間的用法

## 発表の目的

- 仏語母語学習者の日本語作文に現れる非用、誤用を通して、日本語の状態変化表現に関してどのような点が難しいのかを見る
- 日仏の事態把握の仕方の違いを考える

# コーパス

2010-2011年度

パリ・ディドロ大学日本語専攻修士課程1年生

作文

仏語母語学習者25名

# 日仏の大きな違い(1) なる

病気回復後

- 日本語では

新しい状態(S2)をその前の状態(S1)から変化した状態だと把握して表現する傾向がある (例) (もう)元気になった

- 仏語では

新しい状態(S2)だけを表現

(例) Je suis en forme maintenant. /Je vais bien maintenant.

❖このように自分の周りの現象の把握、理解、表現の仕方、Langacker(1990) や池上(2006)等の認知言語学者の言葉を借りれば « construal » は、仏語話者と日本語話者では異なる。

# 日仏の大きな違い(1) てくる

- 直示用法 話者が発話の場で自分を中心にして人やものの動きを自分に接近してくる動きまたは自分から離れていく動きだと認識して表現する空間移動がまず根底にあって、時間的な変化は一般に空間的移動からの拡張と捉えられている(近藤・姫野2012: 48)
- 気候の変化(自然現象) **涼しくなってきた** Le temps se rafraîchit.(Je sens la fraîcheur arriver )

まるで気候の変化も話者に近づいてくるような把握(表現)をすることで、「自然現象の推移を話し手が時間との関係でどう見ているのかが織り込まれ、話し手とのかかわりが表現されている」(池上・守屋2009: 85)

→ **主体的把握**(池上2006, 自分を事態の中において中から眺める)⇔話者が事態を外から眺める(客観把握)

# 「なる」表現習得度別四グループ

第1グループ(状態変化表現不使用グループ)2名

第2グループ(「になる」過剰使用グループ)5名

第3グループ(動詞変化表現未習得グループ)14名

第4グループ(「なる」表現パターン習得済みグループ)4名

## 第1グループ(状態変化表現不使用グループ)2名

「非常事態における多数傍観者の援助の抑制」の要約で「人が多くなれば、援助の反応が遅くなり、人が少なければ少ないほど反応が速くなる」のような説明が必要な状況で「なる」が現れない

- (1) 結果は、反応時間を分析すると、参加者の人数が少ないほど反応が速いと分かれる。
- (2) 人員が多いの場合は反応がありません。多いのグループは反応を遅います。



## 第2グループ(「になる」過剰使用グループ)5名

ある事態を変化と把握して変化の表現を用いようとしていることは分かるのだが、ほとんど形が正しく使えず、正確に使えている例は「Nになる」の形に限定されており、そのパターンをそのままイ形容詞や動詞の変化の表現に誤って使用している。

(3) 恐れを感じがどんどん上がりになった。

(4) 食物を見付けにくいになりました。

このように「に」と「なる」の結びつきが非常に強く、「になる」を変化を表す1つの固まりとして捉え他の用法にも過剰般化する現象は、日本語を第2言語として学ぶブラジル人幼児においても観察されている(久野: 2005)

# 第3グループ(動詞変化表現未習得グループ) 14名(1)

「Nになる」「iAくなる」「naAになる」という形はほとんど正確に区別して使えるが、「Vようになる」や「Vなくなる」の様に動詞で変化を表すときにうまく行かないグループである。困難度は色々

- 副詞表現のみ使用

(5) この日から朝ご飯をいつも食べる(食べるようになった)。

Depuis ce jour, je prends toujours mon petit déjeuner comme il faut.

(6) 村人の影響で筆者は少しずつチェトリが逃げたと思った(思うようになった)。

# 第3グループ(動詞変化表現未習得グループ)14名(2)

- 変化の表現に揺れがある(1部成功しており、1部うまく表現できていない)

(7) それにだんだん暑くなった。そのせいで私は気分が悪くなってしまった。つまり、熱して、呼吸が詰まって、目が濁って、何も聞こえなかった(聞こえなくなった)。Je suis devenu chaud, ai suffoqué, ma vue s'est brouillée et je ne pouvais plus rien entendre.

(8) 私はショックで動かなくなって(動けなくなって)何もできなくなってしまった(できなくなってしまった)のである。

A cause du choc, je ne pouvais plus bouger et j'ai fini par ne pouvoir plus rien faire.

ne...plus (もう...ない)からくるフランス語的状态表現解釈の影響か。(7)の様に動的表現が続いても最後の述語だけに誤用が出るのは、この状況で事態をまとめる自然な見方が仏語では変化ではなく状態だからではないかと思われる。

「もう何もできなくなった」と「もう(これ以上)何もできない」

日本語でも2つの表現が存在する。違いは？

過去から変化した状態であると捉えるときは前者を用い、現在を含め未来につながる状態だと捉えるときは後者を用いる。

仏語ではJe ne pouvais plus, Je ne peux plus, Je ne pourrai plusの様に過去も、現在も、未来も全部ne...plus (もうできない)で表現できる

## 第4グループ(「なる」表現パターン習得済みグループ)4名

「Nになる」「iAくなる」「naAになる」「Vようになる」の文型すべてをほとんど正確に使用できることが作文から確認できるグループで、このクラスで1番できる学生達である。しかし、時として誤用や不自然な使用も見つかる。彼らにとってはどんなところが難しいのだろうか。

## 第4グループ(「なる」表現パターン習得済みグループ)4名に見られる難しさの特徴(1)

- 物語の最後に起こるようなドラマチックな変化の把握・表現と、何かの原因で起こる小さな心理的変化の把握・表現では、後者の方の難易度が高いようである(同じ学生の用例)

(9) 友達が喘息の薬を飲ませてくれた。急に空気がいっぱい入ってきて息ができるようになった。

(10) あるカエルはウシをしばらく見て、すばらしい大きさと思って、とてもうらやましかった(うらやましくなった)。

## 第4グループ(「なる」表現パターン習得済みグループ)4名に見られる難しさの特徴(2)

「できるようになった」は問題なく使えるのに、それを否定状態への変化にすると「できなくなった」ではなく「もうできなかった」という状態表現が急に出てくることがある。仏語のne...plusの影響か。

(11) 冬になると雪が積もりましたから、やむを得ず山猫はくまを見に行くことがもうできませんでした。

## 第4グループ(「なる」表現パターン習得済みグループ)4名に見られる難しさの特徴(3)

変化の結果状態「なっている」や「なっていた」で表す場合

(12) この話から30年後では、エヌ氏がお金持ちのお年寄りになった(なっていた)。派手な家で幸せに暮らしていた。8歳の孫は、特によく遊びに来ていた。かわいくてまじめなから、エヌ氏はこの子に夢中になった(なっていた)。



## 第4グループ(「なる」表現パターン習得済みグループ)4名に見られる難しさの特徴(4)

必要でないときに「ようになる」が現れることがあり、その誤用は「分かる」や「思う」などの動詞と共に現れることが多い。

(13) 店を出て振り返ると、本当は買いたいことが店の主人に分かるようになってしまう(分かってしまう)

分からない状態から、分かる状態に変化するのだから「分かるようになる」でなぜおかしいという質問が学習者からよく出る。

# 「Vた」か「Vようになった」か

## 先行研究の「ようになった」の説明

市川(2010: 532)によると、短時間にそうなったのではなくて、(長い)時間をかけてそういう結果・事態になることを示す。新屋・姫野・守屋(1999: 146)では、長い個人的な習慣の形成や時代の変化などの反復状態への変化という説明がされている。

## 微妙な例(学習者の質問)

### (1)と(2)ではどう違うのか

(1)日本人の友達が分かりやすい言葉で説明してくれたので、この文章がよく分かった

(2)日本人の友達が分かりやすい言葉で説明してくれたので、この文章がよく分かるようになった

## 私の解釈

S1の分からない状態が明確に意識されておりそれが対照的にS2の分かる状態へ変化したと認識される場合は「分かるようになった」が用いられ、S1が意識されていない、ゼロ状態からの変化を描く場合は「分かった」を用いる

# 「なる」表現の困難点のまとめ

(1) 変化と状態の区別が曖昧(認知的問題)  
な場合

(2) 認知の問題ではなく表現の習得の問題

(3) 表現の習得後も残る使用の問題

語用論的問題、変化状況把握の問題

# 「てくる」の時間的用法

近藤・姫野(2012: 48)の分類

(A) 事態の出現

提供者が次々に出て来た

(B) 変化の進展

日に日に暖かくなってきた

(C) 動作の継続

その伝統を大切にしてきました

# 「てくる」表現習得度別グループ

- 第1グループと第2グループ

「帰ってくる」や「持ってくる」などの物理的移動表現しか現れない

- 第3グループと第4グループでは、「出て来た」の様な出現、「なってきた」の様な変化の進展も用いられている。

- 動作の継続を表現した成功例が1例もない

# 日本人は昔から米を食べて来た

この表現使用が自然な状況で仏語母語話者はどうか

- 米を食べていた(動作が完了していると認識)
- 米を食べている(動作が続いていると認識)

継続してきたことを話者の現時点で一旦区切りをつけて捉える表現であるため(話者との関わりを表現)、現状や、今後の状況と対比することも可能だが、「米を食べている」ではそれができない。



# 「てくる」の問題(1)

## 変化の進展と動作の継続の混同

(14) 少しずつそう考えて来た

(考えるようになった/考えるようになってきた)

## 「てくる」の問題(2)

### アスペクト理解の問題

(15) ついに慣れてきた(ついに慣れた/徐々に慣れてきた)

# 最後のまとめ

- 仏語を母語とする日本語学習者にとって、日本語の「なる」や「てくる」の習得の問題は、単なる文法的習得の問題ではなく、どのような状況を状態変化と捉えるかという認知的問題、またどの表現を用いてどのように描写するのが自然かという語用・談話的な問題も含む
- ドラマチックなできごとなど状態変化として捉えやすい状況、心理変化の様に捉えにくい状況など、変化の状況により認知にも難易差がある
- 日本語で事態を変化として動的に把握する状況で、仏語では状態として静的に把握する傾向があるので、それに伴うアスペクト認識が難しい
- 仏語では自分を事態の中に置く主観的把握ではなく事態の外から見る客観的把握をする傾向があり、学習者には直示表現の適切な使用が難しい。
- また、語用・談話面では、できごとを物語るときに、動的に展開する話の最後が状態表現になるなど、話のリズムの一貫性を保つことが難しい